

査読研究ノート

1920年代中国の反キリスト教運動： 研究史の回顧と展望

朱 海 燕*

要旨

1920年代に中国では一部の知識人と青年学生を中心に、国家主権の回復と外国からの文化侵略を排斥することを目標とする反キリスト教運動が起きた。中国を取り巻く国際的な状況に強く影響されながら展開されたこの運動は、キリスト教やその学校教育だけでなく国民革命や政治外交、思想文化などにも多大な影響を及ぼした。この運動にたいする研究は20年代にはじまり、中国本土をはじめアメリカ、日本、台湾、香港、韓国などでも関連研究が行われ、これまで多くの研究成果が蓄積されてきた。研究視点は多様でキリスト教史、学生運動史、学校教育史、政治思想史、神学思想、政教関係など多くの側面からアプローチされてきた。これらの研究によって運動のもつ多面的な性格が明らかになり、運動の全貌も解明されつつある。これからの課題は運動をその展開に影響した諸要素を総合的に分析しながら構築するとともに、参加者たちの人物像と地域的な差にも注目して多角的にみることである。

キーワード

反キリスト教運動、中国、アメリカ、日本、台湾、香港、韓国、サーベイ

はじめに：1920年代の反キリスト教運動とはなにか

近年中国では欧米とりわけアメリカを意識した排外主義の心理から共産党員やその予備軍である共産主義青年団員のクリスマス祝賀イベントへの参加を禁止する傾向にあり、2017年のクリスマスにも地方党部や団部から参加禁止令が出されたという¹。

このような消極的な反対は政府当局の指示によるものであるかどうかは定かではないが、クリスマスにかかわる反対運動は1920年代の反キリスト教運動（「**Anti-Christian Movement of China in the 1920's**」, 以下、反基運動と略す）においてもあった。1924年から1927年にかけて行われた「反キリスト教週」キャンペーンがそれである。クリスマスの前後6日間、つまり12月23日から28日までを「反キリスト教週」とし、デモ行進、講演会、街頭演説、礼拝や学校

* 執筆 者：朱海燕
所属／職位：明治学院大学キリスト教研究所／客員研究員
機関住所：〒108-8636東京都港区白金台1-2-37
E-mail：haiyan0305@hotmail.co.jp

授業の妨害などを主な内容としたこのキャンペーンは国共両党の主導のもと積極的に行われ、1924年以後の反基運動の重要な活動の一つとなっていた。本稿はこの「反キリスト教週」キャンペーンが発生した1920年代の反基運動に関する研究史を回顧し今後の課題を展望するものである。

では、1920年代の反基運動とはなにかについて簡単に紹介しよう。周知のように義和団運動は清朝末期外国宗教に反対した排外運動のピークである。1920年代の反基運動はこの義和団運動に匹敵するものであり、ともに近代中国がキリスト教に反対した二つの典型をなしている。義和団は読み書きのできない農民大衆の武装組織を主体とし、伝統的な民衆文化に根付いた、国家の擁護・外国宗教の排斥・伝統文化の擁護を目指した、カトリックを主な攻撃対象とする反キリスト教事件だった。これに対して1920年代の運動は近代西洋思想や国家主義・共産主義の新思想で武装し、読み書き能力を身につけた新知識人たちによる、国家主権の回復と外国からの文化侵略を排斥することを目標とした、近代国民国家の建設において障害であると想定されたキリスト教会とその学校を破壊（統制）しようとする動きといえよう²。そのおおよその粗筋は次のとおりである。

運動は1922年にスタートを切るが、きっかけは同年世界キリスト教学生同盟第11回会議の北京の清華学校での開催である。これに反対して上海の青年学生たちは「非キリスト教学生同盟」を結成し、北京でも知識人の大連合である「非宗教大同盟」なるものが組織された。彼らは、キリスト教会は資本主義国家の経済侵略の前衛隊である、世界キリスト教学生同盟会議は中国の青年を侮辱し、中国の人民を騙し、中国経済を略奪する強盗会議である、宗教は毒害であり、科学・人道主義に背くものであるなどを理由に、文章・言論による猛烈な批判を繰り返した。その呼びかけのもと反対運動は瞬く間に全国の10の省に広がったが、長続きせず同年夏にすぐに下火になった。

その後、1924年にミッションスクールの教育権を回収する運動が起きると、教育界を中心とし比較的地道に進められた回収の動きと相まってキリスト教教育の打倒を目的とする反基運動が再開された。1922年の運動に比べて共産党や国民党、青年党（国家主義派、醒獅派ともいう）など政党の動きが目立ったが、主力は依然として学生であった。また、上述したような反対内容に加えて、ミッションスクールは中国の教育の統一を妨害し侵略的な教育を行っている、宗教はアヘンである、外国人の神父・牧師は中国人の民族的覚悟と愛国心を破壊していると非難した。

1925年の五・三〇事件（五卅惨案）³、沙基事件以後、運動は帝国主義の文化侵略に反対する反帝国主義運動に昇華し、知識人、学生運動の枠を超えて民衆運動の側面をもつようになり、北伐の過程では義和団のような外国人宣教師の殺害、教会の破壊などの暴力事件（1927年の南京事件）も発生した。その後、「非」の度を越えて排外運動と化した反基運動は、国民革命が勝利し国共合作が崩壊すると、南京国民政府によって停止させられることになる。

このように、反基運動は中国が置かれた当時の情勢と密接に絡んでおり、五四新文化運動以来の文化革命と政治革命の性格を強く帯びているが、批判・排撃の面に立たされた中国のキリスト教会は大きな打撃を受け、運動によって教会の土着化（当時は「本色化」といわれた）とミッションスクールの中国化（中国政府への登録）が強く後押しされた。

上述の反基運動の概要からも窺えるように、この運動は政治、思想、外交、教育、宗教などの分野を跨るだけでなく、新文化運動、五四運動、主権（教育権）回収運動、国民革命など中華民国の重大な出来事とも密接な関係にあった。そのため、運動への研究の切り口も多種多様化しており、多分野に及んでいる。その研究は運動が進行中であった20年代半ばから行われ、中国、台湾、香港など中華民国を引き継ぐ国や地域だけでなくアメリカ、日本、韓国においても注目を浴び、これまで多くの研究成果が累積されてきた。以下では、研究の主流をなした中国、台湾、香港、アメリカと比較的に独自の発展を遂げた日本、韓国の二つのグループに分けて研究史を整理する。

一 中国、台湾、香港、アメリカにおける研究

運動にたいするはじめての系統的な研究は1925年に書かれた謝扶雅の「近年非宗教及非基督教運動概述（近年の非宗教および非キリスト教運動の概略を述べる）」⁴である。

当時全国キリスト教青年会全国協会総務部文書幹事だった謝扶雅（1892-1991年、英文名 N. Z. Zia）⁵のこの文章は、かれが1925年4月1日に書き上げたもので、キリスト教側ことに中国キリスト教青年会全国協会の運動に対する関心を端的に示すものであった。

謝はこの論文で運動の発展趨勢に注目し、運動を、1919-21年の「非宗教思想の形成期」と、1922-23年はじめの「非宗教運動の発動期」、1924年-現在（1925年4月1日）までの「あらゆる宗教を非とするところからキリスト教のみを非とするまでの進行期（由汎非宗教而至専非基督教的進行時期）」の3つの時期に分けて紹介している。これはその後『国内近十年来宗教思潮』（燕京華文学会出版、1927年）を編輯した張欽士が採用した時期区分とほぼ同じである。張欽士は1927年までの「約10年」を3期、つまり（1）1917-21年の「討論宗教時期」、（2）1922年の「非宗教運動時期」、（3）1923-27年の「反キリスト教運動とキリスト教内部の革新時期」に分け、第一期は「理性」的な面に偏り、第二期は「感情」的な面に偏り、第三期は「意志」的な面に偏っていたのが特徴で、二期は言論に限定されていたが、第三期は言論にとどまらず、事実的な攻撃、組織的な活動でもってキリスト教を標的にしたものであるが、この第三期で注目しなければならないのは「キリスト教内部の革新運動である」と述べて、該書を編集している⁶。両者の主な分岐点は運動が1923年で一旦途切れるかどうかであるが、1924年の国共合作、中ソ・奉ソ協定を一、二期と三期の境界とみる場合、謝の区分のほうがより運動の実際の展開に合っていると筆者は考える。

謝の論文を詳しくみると、「非宗教思想の形成期」は「宗教一般にたいする研究討論の時期」で、新文化運動とフランス留学組の宗教嫌いの傾向が「非宗教」思想の源になったという。そして「非宗教運動の発動期」である1922年の運動は世界キリスト教学生同盟会議に反対して起きたけれども、運動の中心的な目標は一切の宗教に反対することであったとする。これについては謝の観察が甘く「非宗教」という看板に捕われて反キリスト教の内実に気づいていないと言わざるをえない。

そして「あらゆる宗教を非とするところからキリスト教のみを非とするまでの進期」については、「非キリスト教」の視点の違いによってさらに、(1)「国家主義からみる非キリスト教教育運動」と、(2)「反帝国資本主義からみる非キリスト教運動」、(3)「儒教・道教・仏学からみるキリスト教に対する批判」の三つに分類し、(1)では教育界における反キリスト教教育の動きを、(2)では1924年に再結成された「非キリスト教同盟」の活動および「非キリスト教」の態度が鮮明な団体として共産党や国民党の影響下にある団体を紹介し、(3)ではキリスト教は儒教と道教に劣っていると主張する聶雲台の『宗教辨惑説』とキリスト教の「仏教化」を求める張純一の『仏化真基督教』という本の出版に触れている。このように、謝は運動を「非宗教運動」の枠組みのなかで捉えていたが、運動の大きな流れはおおよそ彼のいうとおりであった。

次に同運動を論じたのは、アメリカの歴史学者のケネス・S・ラトゥレット (Kenneth S. Latourette, 1884-1968年) である。エール大学の学生志願者運動 (The Student Volunteer Movement) に参加し、1910年から2年間教育宣教師として湖南省長沙の雅礼大学に派遣されたことがあるラトゥレットは、帰国後、複数の大学で歴史学を教え、1921年からは出身校のエール大学の神学院で宣教学 (missions) を教授しはじめた。こうした経験もあって、彼は中国宣教に行ったアメリカの海外宣教団体たちの協力のもと、1929年に *A History of Christian Mission in China* (New York: Macmillan) という西洋の学術界において現在もおおきな権威的な著作とされている大著を出版した。全30章、930頁からなる同書は、唐の時代から1926年までの約1300年にわたるキリスト教の中国における断続的な伝道活動を描き出したもので、中国キリスト教史研究の基礎を築いた東西初の通史である。同書は出版されてから常に高い評価を受け、1950年代初めにもなお燕京大学宗教学院の蔡詠春、趙紫宸らによって「中国キリスト教史を研究・閲覧するに唯一の既製のテキスト」と称され、翻訳の計画が練られていたという⁷。このように、同書は中国キリスト教史研究の「経典」と言われてきた。しかしながらラトゥレット自身も認めたように、いくつかの欠点をもっている。たとえば、参考資料の制限を受けて下限を1926年までにしたことや、その前の10年あるいは12年の記述が比較的簡略であること、著者の信仰上の立場によってカトリックよりもプロテスタントの発展を重視し多くの紙幅を割り当てたこと、著者が西洋人であるがために、中国人信徒よりも外国人宣教師の伝道活動に重心をおいたことなどである⁸。また、同書の漢訳版の訳者である雷立柏が、「幾人かの西洋の学

者がかつて、ラトゥレットはある種の『勝利主義 (triumphalism)』に傾いているといったことがある⁹と紹介したように、この本には中国での伝道動機とその活動を「神聖化」、「正当化」する記述や、西洋文化優位論に立った論述が散在することも確かであるが、しかしこうした欠陥はこの本の価値を損なうことはできず、現在なお必読すべき一冊である。

では、ラトゥレットの反基運動に対する見解を見てみよう。彼は本のなかで1914年から1926年までの伝道事業に大きな変化をもたらした要因の一つとして同運動を取り上げているが¹⁰、その勃発を招いた潜在的原因を、「激高した愛国精神と『新文化運動』の破壊的な批判態度」¹¹にあるとし、西洋の懐疑主義と不可知論がこれらの要因を強化したとする。なぜなら、中国人の学生は幼いときから、宗教を軽視する雰囲気の中で育ったため、欧米に留学したとき、留学先の思想のなかの宗教にたいする疑義にも大変好意をもつようになるからだ、という¹²。前にも触れたようにラトゥレットの研究は、上で紹介した謝扶雅の研究を参考としながら、1925年5月以降の部分に補っている。しかし、彼は謝の運動を「非宗教運動」と捉える見方には賛成せず「反基運動」と訂正し、運動を1922年の世界キリスト教学生同盟にたいする反対運動と1924年からのミッションスクールにたいする反対運動の二つに分けている。1922年の運動については運動の反キリスト教的性格を認め、あきらかに学生運動だったと指摘する。1924年以後の運動については、ミッションスクールが反対される原因として、そこに勤務する中国人教師たちの外国人宣教師による「文化侵略」への危惧、ミッションスクールの学生たちの学校当局にたいする不満、公立・私立学校の教師たちがミッションスクールに対して抱えている妬み、人々のミッションスクールにたいする不信感、ソ連共産主義の学生たちに与えた影響などを、新たに提示している。また、「国民党の左派はロシアの影響を深くうけ、とりわけ教会を痛恨している」¹³と述べる。

このように、ラトゥレットは同書で、運動発生の潜在的原因や運動のなかにおける政治的要素、とくにソ連の要素に目を配っている。運動それ自体について言えば、ラトゥレットの研究が最も客観的で運動の本質を掴んでいたといえよう。

1940年代に入ると、運動の経験者で、当時積極的に教会の「本色化」を呼びかけた教会史学者・王治心（1881-1968年）が『中国基督教史綱』（青年協会書局、1940年）を著し、同書のなかで同運動について語っている。王は浙江省呉興（現・湖州）の人で、清末の生員で国語の造詣が深い。運動当時、南京の金陵神学院の国語と中国哲学の教授、兼同校が発行する雑誌『金陵神学誌』の編集を担当していたが、1925年に「本色教会」を理論面で研究する中華キリスト教文社が設立されると、その主任編集（1926-28年）も任じられたことがある。

『中国基督教史綱』は、王治心が当時全国青年協会編集部主任呉耀宗の要請をうけて著したもので、中国人による初の中国キリスト教通史である。中国における唐の初めから1930年代までのキリスト教の歴史を取り上げた同書（全22章）は、キリスト教が中国で経営する事業と活動は新しい中国の建設とどのような関係があるかなどの問題意識をもち、1920年代の中国教会

の「本色運動」についての思考の延長といってよいだろう。しかし、残念なことに同書は謝扶雅やラトゥレットの研究に見られるような謹厳さや客観性は失われてしまい、上海の復旦大学教授・徐以驊が指摘するように、外国人宣教師を主体とする宣教史の枠組みを超えることができず、その内容においても全体的に非常にアンバランスであり、「キリスト教を守る姿勢が強く」、内容もかなり「おおざっぱ」で「間違いが多い」という¹⁴。

次に王の運動にたいする記述を見てみよう。彼は第20章「非基同盟与本色運動」で、運動と教会の「本色運動」とを連結させて論じている。まず、はじめに「非基同盟」の発生原因とその性格を述べてから「非キリスト教同盟」の結成とその活動を説明しているが、しかし活動についての記述はいささか問題のあるもので、説明に連続性がなく、記述するときに「その時」や「翌年」というあいまいな表現をよく使い、加えて1922年の運動と1924年以後の運動についての記述が錯綜しているため、運動に詳しくない読者にはすべてが1922年に起こったような感を与えやすい。そして1924年以降キリスト教と学校教育が激しく批判されたことなどについてはほとんど言及していない。また中国教会の「本色運動」についても当時「本色教会」の熱唱者で数多くの「本色論」を発表した著者にしては、その記述がやや一般に流れてしまった感がある。

以上見てきたように、1940年代まで三つの重要な研究があった。それらはいずれもクリスチャン知識人たちによって書かれたもので、教会側の代弁者でありながらも1949年以後の政治イデオロギー色に強い研究とは違って客観性の高いものであったが、研究はまだ初歩的な段階にとどまっていたといわざるを得ない。

王書が出版された後、数年経たないうちに中国と世界では天地を覆す変化が起こった。1945年、日中戦争が日本の無条件降伏で終わり、さらに4年後には共産党軍が国民党軍を打ち下して内戦で勝利し、中華人民共和国を樹立した。大陸を失った蒋介石の国民党は台湾島に退き、台湾における中華民国の歴史がはじまる。そして世界も、第二次世界大戦終結後、それぞれアメリカとソ連を頭とする資本主義と社会主義の二大陣営に分かれ、朝鮮戦争やベトナム戦争——この2つの戦争に中国はいずれも主体的に関与して社会主義を信奉する金日成政権とホーチミン政権を支持した——など一連の熱戦を経たのち冷戦状態に突入した。このような政治的イデオロギーがすべてを左右する環境のなかで、共産党中国は戦後かつてない試練に直面し、大躍進、反右派闘争、文化大革命とつづく大動乱のなかで社会は混乱を極め、すべての学術的な営みはほとんど破壊され、それが70年代末まで続く。当然ながら宗教的な営みも次第に中止され、文化大革命中はすべての宗教活動が停止した。

一方、アメリカでは1950年代から著名な中国学者ジョン・キング・フェアバンク (John King Fairbank, 1907–91年、中国名は費正清) やその弟子ポール・コーエン (Paul A. Cohen, 1934年-) などを中心に、中国研究ブームが起こり、多くの研究成果が輩出された。太平天国、義和団運動、五四運動など近代中国を対象としたこの研究ブームは、朝鮮戦争やベトナム戦争

におけるアメリカの失敗を背景にもつもので、その意味においては、時代遅れで貧乏な中国は どうして強大なアメリカに対抗することができたのか、その力はどこからきたものか、という 疑問の下で行われたアメリカ学術界の反省会とも言い得るものであった。

中国研究ブームの波に推されて1920年代の反基運動に関する研究も大きく前進した。その代 表的な研究に、五四運動史の流れのなかで非宗教の思潮を論じた周策縦（Chow Tse-tsung, 1917–2007年）の *The May Fourth Movement*（Cambridge: Harvard University Press, 1960, pp. 314–27）¹⁵や、学生運動の方面からアプローチした葉嘉熾（Ka-che Yip）の “Nationalism and Revolution: The Nature and Causes of Student Activism in the 1920s”, Chan and Etzold, *China in the 1920s*（New York, 1976）と *Religion, nationalism, and Chinese students: the anti-Christian movement of 1922–1927*, Bellingham: Center for East Asian Studies, Western Washington University, 1980、中国キリスト教大学史やナショナリズムの 研究から運動に接近したジェシー・グレゴリー・ルツ（Jessie Gregory Lutz、中国語では 盧茨または羅滋と訳されている）の *China and the Christian Colleges, 1850–1950*, Cornell University Press, 1971¹⁶や、 “Chinese Nationalism and the Anti-Christian Campaigns of the 1920s”, *Modern Asia Studies*, 10, 3(1976)、*Chinese Politics and Christian Missions: The Anti-Christian Movements of 1920–28*, Notre Dame: Cross Cultural publications, 1988など がある。

アメリカにおけるこれらの研究成果はその後台湾や香港、中国に紹介された¹⁷。それによれば、周の研究は五四新文化運動期の新思想の導入とそれによって引き起こされたいくつかの論 争の一つとして「非宗教運動」を取り上げ、少年中国学会の宗教問題に対する討論を中心に反 対言論を分析した。また当時の知識人が実用性をもって宗教を評価する基準としていたことを 指摘し、この運動は仏教改革運動や中国のキリスト教会の革新運動に影響を与え、人々の宗教 にたいする関心を引き出したという¹⁸。葉嘉熾は上述した周策縦やその他のアメリカでの研究 成果を踏まえながら、1917年から1923年を時限に、唯物主義、マルクス主義、自由主義、無政 府主義、美学などの方面から民国初期の知識人たちの反宗教思想の学理的な基礎を考察し、彼 らをして宗教について考えさせたのは救国願望からだったと指摘する¹⁹。また、葉嘉熾は1919 年以後の学生の政治的行為の分析にも焦点をあて、1920年代の学生のなかには急進主義が芽生 え、また階級意識ももつようになったとする。そして学生らは普遍的に当時の教育体制や軍閥、 帝国主義に不満をもち、前者の改善と後者（軍閥と帝国主義）の消滅を訴え、このような学生 の急進的な運動に国共両党が大きな影響を及ぼしたが、運動の根底にあったのは救国の理想 だったと、知識人の反宗教の目的と同じ結論に到達する²⁰。この2本の論文は前出の葉嘉熾が 1980年に出版した著作の一部となっている。最後にルツの研究についてみると、彼女は 『中国教会大学史：1850–1950』のなかで「中国民族主義の挑戦」として1920年代の反基運動 を取り上げ、運動の発生原因とそのいきさつを考察するとともに教育権回収運動に焦点をあて

運動のミッションスクールに与えた影響を明らかにしようとした²¹。また、『中国現代史論集』に収録された「中国民族主義と1920年代の反基督教運動」という論文においても民族主義に注目し、伝統的な中国は文化主義の国であったが、1922年の運動において学生のなかで懐疑主義と民族主義が台頭しはじめ、第二の反基運動である教育権回収運動において文化主義は完全に政治化して民族主義になった。そして中国が伝統的な国から現代の民族国家に移る過程において、キリスト教は中国の正統思想と国家意識の脅威とみなされたという²²。ルッツのこの論文は非常に理解しにくく、事実誤認も少なくない。このように、アメリカの研究はアプローチの方法はそれぞれ違うが、いずれもナショナリズムに注目したものであった。

これらのアメリカの研究に促されて1980年代から1990年代にかけて台湾、香港では多くの研究成果が出るようになり、研究視角もさらに多面化し従来の歴史学に基づいた研究のほか、政教関係や神学思想などに着目した研究も現われはじめた²³。林榮洪『風潮中奮起的中国教会』(香港：天道書樓有限公司，1980年)や、査時傑「民国基督教史(3)：『非基運動』与『本色化運動』時期(1922-1927)」(『国立台湾大学歴史学系学報』，第10・11号，1984年12月，375-436頁)²⁴、趙天恩編の『中共对基督教的政策』(台北：中華福音神学院出版社，1986年)、葉仁昌『五四以後の反对基督教運動—中国政教關係的剖析』(台北：久大文化股份有限公司，1992年)、王成勉『文社的盛衰』(台北：財団法人基督教宇宙光傳播中心出版社，1993年)などがこの時期の成果である。そのうち、林書と葉書はこの時期の香港と台湾の研究動向を表す代表作といえよう²⁵。次にその内容を簡単に紹介する。

当時香港・中国神学研究院の講師であった林榮洪の研究は、近代中国宗教哲学思想史の面から運動が中国キリスト教の「本色」神学思想に与えた影響を考察したものである。林によると、第一次世界大戦後、一部の神学の面で開放的な中国キリスト教知識人たちが科学と民主の原則に合った新しい宗教を建設することをもって国家の求め(国家再建)に適應する必要性を痛感したこと²⁶と、社会救済の福音メッセージが声高になるにつれて「キリストを中心とする基準が本色神学創作の基礎」となり、反キリスト教思潮の攻撃に対応する中で、中国キリスト教知識人によって次第にイエス・キリストを中心とする——つまり、イエスの崇高な人格や道徳、犠牲精神、環境への適應(イエスがヘブライの伝統を新しい宗教信仰に変えたこと)、復活などを強調する——中国キリスト教会の「本色護教神学」が生まれたという²⁷。キリスト教が批判された理由については、キリスト教が中国に紹介された西洋の近代思想と相容れなかったことと、当時の中華民国が近代化の建設を進めるときの邪魔者とみなされたことにあるとし、その根底にあったのが国家主義(ナショナリズム)だという。だから、政治的な角度からみると、反基運動は主として一部の国家主義者による「国家主義的な『宗教』で以てキリスト教に取って代えようとした試み」²⁸であったと指摘する。最後に、林は、中国キリスト教会は上述したイエス・キリスト教を中心とする原則でもって、共産主義者と国家主義者にキリスト教の精神を訴え続けたが、しかし「中国の伝統的な排外と宗教を拒む意識、それに加えて民主と科学を

崇める態度によって、一般的な知識分子は（キリスト教徒の）宗教的答えを受け入れ難かった」と結論づける²⁹。

台湾の学者・葉仁昌の研究書はタイトルどおり政教関係の角度から運動をとらえたもので、林榮洪と同じく運動の思想的側面を強調して1920年代の反基運動を一つの風潮とみなし、その下限を1928年としている³⁰。彼によると、伝統的な中国における政教の常時モデルは、宗教を寛容、吸納（吸収し収める）、転化、整合させて国家の一部として「属させる」、「国家宗教」あるいは「国家の下の宗教」であったが、この政教モデルが宣教保護条約を含む一連の不平等条約によってつくられた条約体制によって破壊され、外国人宣教師や「教民」（信徒）つまりキリスト教が国家・王法を凌駕する状況が生まれた。このような新たな政教関係が清朝晩期の無数の教案（反キリスト事件）の発生を刺激し、影響を及ぼした。それは1920年から1928年の間の反キリスト教風潮にも極めて大きな触媒作用として働き、1920年代の反キリスト教風潮は、清朝中葉以来のキリスト教が中国政権と王法を凌駕した政教関係を打破して、再び中国の伝統的な「国家宗教」あるいは「国家の下の宗教」とする局面に戻らせることにその趣旨があった、という³¹。それから前述したルッツの文化主義から国家主義への移行という解釈を補完し、清朝中葉以来、文化主義的な反キリスト教はしだいに国家主義的な反キリスト教に転換し、1920年代の反キリスト教思潮もこの現象を受け継いでおり、文化主義的な反キリスト教は民国以後はほぼ国家主義的な反キリスト教に完全に取って代えられた、と述べる³²。このうえで葉仁昌は、運動に働きかけた国家主義を、1920-21年の科学・美学・社会主義および人文主義を用いた反キリスト教を内容とする「功利原則的国家主義」（*utilitarian nationalism*）と、革命的な需要と政党の助長をうけた1922-28年の「反帝国主義」を目的とする「意理式的国家主義」（*ideological nationalism*）とに分け、後者はまた北伐で統一を果たしたあとには対外的な「防衛的な国家主義」（*defensive nationalism*）から対内的な「統整的な国家主義」（*integrative nationalism*）に転換したという³³。最後に運動に対するキリスト教側の対応を分析し、キリスト教側（護教陣営）は反キリスト教的な言論に答弁するなかで、「イエスは世俗的なメシアであり」、革命的であるという反対の強い環境に対処（「処境化」）した政治神学をつくりだした、とまとめているが、これはあきらかに前述した林榮洪の研究を発展させたものである。

このように林榮洪と葉仁昌の研究は、「本色」神学思想と政教関係を軸に1920年代の反基運動を研究し、運動に新たな意味合いを付与した点において意義ある試みであったといえよう。ことに反基運動に対応するなかで世俗化したキリストを中心とする「本色」護教神学思想が形成されたことを再構築したことは評価すべきである。しかし、運動そのものにたいする考察を見た場合、自明のものとされ、詳細な考察は行われていない。また、葉仁昌の国家権力と宗教関係から運動を論ずるのは議論の余地があるように思われる。

他方、中国本土においても1980年代から成果が発表されはじめた。宣教師の活動に注目した顧長声『伝教師与近代中国』（上海：上海人民出版社，1981年）や、中国共産主義青年団史研

究を出発点とする陳善光「論我国早期的非基督教運動」(陳善光編『青年運動史論集』広州：華南理工大学出版社、1988年、80-92頁)、五四期の知識人たちの宗教に対する思想的転換を論じた趙清「従反『孔教』運動到『非宗教大同盟』運動——五四前後知識分子反宗教道路剖析」(中国社会科学院科研局等編『五四運動与中国文化建設——五四運動七十周年學術討論會論文選』下冊、北京：社会科学文献出版社、1989年、733-754頁)、宣教史と中外関係史の視角から中国におけるカトリックとプロテスタントの全歴史を扱った顧衛民『基督教与近代中国社会』(上海：上海人民出版社、1996年)など多くの研究成果が世に出されたが、80年代の研究の多くは中国共産党の歴史史観の影響を強くうけたものであった。興味深いことに共産党による外国人が中国で行った教育を「文化侵略」とする反帝国主義をベースとする史観はまさに1920年代の反基運動で形成されるのである。

その後、学术界において見直しが行われたが、「文化侵略論」は現在もなお中国政府の西洋キリスト教に対する正式な立場である。2003年に宗教文化出版社から刊行された『前事不忘後事之師：帝国主義利用基督教侵略中国史実述評』(羅冠宗・編)がその証といえよう。宗教文化出版社とは中国国家宗教事務局の主催下にある出版機構で、中国政府の宗教政策を代弁する窓口のようなものである。この本には、同書の編集者で元中国キリスト教三自愛国運動委員会主席であった羅冠宗が自筆した「非基督教運動的矛頭主要指向帝国主義利用基督教侵略中国(非キリスト教運動の矛先は主として帝国主義のキリスト教を利用して中国を侵略したことに向けられた)」という、50数頁にもおよぶ長文が収録されている。それは政府の「文化侵略論」の立場を表すものであった。

とはいえ、改革開放が進むにつれて学術分野における国際交流が次第に盛んになり、1990年代にアメリカの支援のもと、華中師範大学(その前身はキリスト教大学の華中大学)に中国キリスト教大学研究センターがつくられ、キリスト教大学史をはじめ中国キリスト教史の研究が著しい発展を見せ、主流研究の仲間入りを果たしつつある。前に挙げた80年代以後の研究蓄積もこのような研究環境の好転を背景にもつものだった。そして1994年にはアメリカ、台湾の研究成果を踏まえた中国本土での最初の専門書が世に出た。当時四川師範大学の副教授である楊天宏の『基督教与近代中国』(成都：四川人民出版社、1994年)がそれである。この本はその後中国国内におけるキリスト教史と中華民国史研究のブームに推されて2005年に北京の人民出版社より『基督教与民国知識分子：1922——1927年中国非基督教運動研究』と改名した増補修訂版が出されている。

中国近代史の流れのなかで運動を捉え、清朝末期の反キリスト教教案との比較を通して運動の性格をあきらかにしようとした楊天宏の研究は、清朝末期の反キリスト教(主にカトリック)運動の歴史を回顧してから、運動を、新文化運動による思想の準備期(1915-21年)、その発生と社会の反響(1922年3-6月)、教育権回収運動の開始(1924年5月-1925年4月)、民族主義の全面的な高まりとキリスト教が直面した新たな挑戦(1925年5月-1927年4月)の四段

階に分けて論じ、「余論」では運動と近代「教案」との比較と、キリスト教の「本色化」に与えた影響を分析し、全体的にバランスよく仕上がっている。外国の成果をあまり顧みない中国国内の研究とは違って積極的に海外の研究成果を取り入れたところと、大量の資料を駆使してこれまであまり研究されてこなかった運動そのものに力を入れ、運動側だけでなく反対されたキリスト教側の反応についても論究した点は評価すべきである。筆者も同研究に進むときに楊の研究から多くの示唆をうけた。しかし、「非キリスト教運動は民族主義の旗幟を高く掲げ、民族自覚意識と独立精神を激励し、西洋列強の各種形式の対華侵略に反対し、盛んに展開されつつある民族・民主革命を力強く促進した」³⁴という結論からわかるように、先行研究を無批判に受け入れて運動のナショナリズム的な性格を評価しすぎる側面がある。また、重点考察対象としているものの、運動における政党の働きすなわち国共両党と国家主義派の運動との関わりについては十分に解明されていないように思われる。

近年、反基運動に関する新たな研究は中国本土で見られるが、台湾や香港では90年代を境にほとんど研究が出ていない。本土の注目すべき研究としては教育権回収運動を深く分析した楊思信・郭淑蘭の『教育与国権—1920年代中国收回教育権運動研究』（北京：光明日報出版社、2010年）や、楊劍龍『「五四」新文化運動与基督教文化思潮』（上海：上海人民出版社、2012年）を挙げることができる。とりわけ前者は1920年代の教育権回収運動に関して地道に考察し、楊天宏が残した課題でもある国家主義派の同運動における活動に力を入れ、課題解決に貢献している。そのほか、海外の優れた研究の紹介も行われ、台湾の研究者・呂実強による『近代中国知識分子反基督教問題論文集』（桂林：広西師範大学出版社、2011年）が本土で出版されている。そして2015年には唐曉峰・王帥編の資料集『民国時期非基督教運動重要文献彙編』（北京：社会科学文献出版社）が出版された。これは張欽士（1927年）以来の資料集の出版で、これらにより運動における代表的な言論を把握することができる。資料集の出版によって運動への注目と研究がさらに前進することを期待する。

二 日本と韓国における研究

（1）日本について

日本の運動について触れた研究はかなり早く、1920年代後期にすでに中国通で昭和期の国家主義者として知られる長野朗（1888–1975年）による『支那の反帝国主義運動』（東京：行地社出版部、1927年）と、一貫して中国無産階級革命を支持した鈴江言一（1894–1945年）が著した『中国無産階級運動史』（満鉄調査課、1929年）³⁵がある。反基運動を反文化侵略運動として論じた長野朗の研究と青年たちの反帝国主義運動として取り上げた鈴江言一の本は、運動をよく観察しており、当時としては容易に見かけることのできない貴重な資料を多く利用している。しかし残念なことに二人の研究は中国に紹介されることがなく、反基運動の研究に十分生

かされることはなかった。その後、1940年代には宗教学者・比屋根安定が『支那基督教史』(東京：生活社、1940年)で民国期の基督教について紹介するときに、ごく簡単に触れており、中国革命に同情的であり、戦後日中国交回復に尽くした岩村三千夫(1908-77年)が『中国学生運動史』(東京：株式会社世界評論社、1949年)のなかで大革命時期の学生運動として1924年以後の反基運動に言及している。

それから1960年になると、国際基督教大学教授・山本澄子が1953年アメリカで出した論文をもとに「一九二〇年代の反基督教運動について」(『史観』第57・8冊、1960年3月、96-116頁)という論文を発表した³⁶。山本はそのなかで、運動における新思想とナショナリズム、共産主義の三要素に注目し、「一九二二年から一九二七年まで続いた反キリスト教運動は、先ず共産主義の影響下に起こると共に、科学を主眼とする新思想と結びついて進展し、一九二四年以降、教育権回収運動・反帝国主義運動を中心とするナショナリズムによって促進されたもので、その背後には絶えず共産主義の影響が認められる。ミッションスクールに対する積極的な反対運動や暴力を伴う破壊行為によって、キリスト教会の活動は大きな打撃を受けたが、一方、この反キリスト教運動はキリスト教会の自立中国化を促進する機会となり、また中国人キリスト教指導者の神学思想展開の契機をなした」³⁷と、明瞭にまとめている。しかし、ナショナリズムの概念が明確でなく、共産主義に注目するあまりその他の政党や団体の働きが見えなくなっている。

90年代に入ると中国キリスト教学校教育史全般を扱った佐藤尚子『米中教育交流史研究序説—中国ミッションスクールの研究』(東京：龍溪書舎、1990年)³⁸と石川禎浩「1920年代中国における『信仰』のゆくえ—1922年の反キリスト教運動の意味するもの」(狭間直樹編『1920年代の中国』汲古書院、1995年、67-95頁)³⁹の二つの力作が現れた。教育学者で中国キリスト教教育史研究において多くの成果を残している佐藤の同書からは、1920年代の教育権回収運動の全貌を窺うことができる。しかし同運動と密接な関係のある反基運動については概論にとどまり、踏み込んだ議論をしていない。中国共産党史の研究で知られている石川禎浩は同論文で1922年の運動を丹念に考察し、運動を推進した上海「非基督教学生同盟」と北京「非宗教大同盟」の結成をそれぞれ再組織されたばかりの中国社会主義青年団とフランスからの無政府主義的反宗教の影響に求め、「反宗教、反キリスト教の強烈な意識は、いささか逆説的ながら、それに対置すべき『信仰』への根強い希求へと転じて、1920年代、とりわけ国民革命期をいりどる「革命精神」を形づくることになる」⁴⁰と、そのもつ意義を中国革命史の角度から興味深く指摘している。

近年、中国本土ほどではないが、中国人留学生を中心に当該研究に関する研究成果が続出している。キリスト教会の「本色化」運動にたいする考察を目的とした徐亦猛の「中国におけるキリスト教本色化(土着化)運動：1920年代を中心に」(関西学院大学博士論文、2010年)や、中国が置かれた国際的環境に目を配りながら中国近代史の流れのなかで、運動にたいする国共

両党の態度や運動そのものの進行を地域的な特徴に合わせて考察した朱海燕の「中国の共産主義と反キリスト教運動——1922年の世界キリスト教学生同盟会議の開催への反対」（『アジア研究』第62巻第3号，2016年7月31日，69–85頁），「『非教』と『護教』のせめぎあい——1922年の広東における『非キリスト教』運動——」（『明治学院大学キリスト教研究所紀要』第49号，2017年2月，53–80頁），「中国国民党と反キリスト教運動——1925年孫文のキリスト教的葬式を手掛かりに——」（『明治学院大学キリスト教研究所紀要』第50号，2018年1月，73–100頁）などがそれである。そのほか，義和団研究で知られる東京外国語大学名誉教授・佐藤公彦が『中国の反外国主義とナショナリズム——アヘン戦争から朝鮮戦争まで——』（東京：集古舎，2015年）において，「国民革命期の反外国主義」として1920年代の反基運動と1927年の南京事件を取り上げている⁴¹。

（2）韓国について

韓国で最初に1920年代の反基運動について言及したのは日本人学者の澤正彦である。彼は「中国에서의 基督教와 反基督教運動」（『神学思想』第6号，1974，pp. 639–658）で，キリスト教が最初に中国に伝来して以来の数回にわたるキリスト教の布教と反キリスト教の歴史に注目した。1920年代の反基運動については主に前述した山本澄子とラトゥレットの研究に依拠している。

その次にこの運動に関心を示したのは現在鮮文大大学教授である呉在環である。彼は台湾留学中の1986年に韓国の『歴史学報』第111輯（同年9月）に「五・四運動期 前後 中国知識人の 反基督教論争」を発表しているが，これは明らかに当時在米台湾人学者・葉嘉熾や清末の教案研究で知られる呂実強などの研究に促されたものだった。

1990年代には韓国の著名な中国研究者・閔斗基の群衆運動としての国民革命との関係を論じた「国民革命運動과 反基督教運動」（閔斗基編『中国国民革命運動의 構造分析』지식산업사，1990年，pp. 141–179）と反キリスト教運動の朝鮮の社会主義運動に及ぼした影響を考察した姜明淑の「1920년대 중국 반기독교운동과 식민지 조선의 사회주의운동（1920年代中国反キリスト教運動と植民地朝鮮の社会主義運動）」（『한국기독교와 역사』제8호 1998.3，pp. 143–171）があるが，とりわけ閔斗基の国民革命を推進した国共両党（および社会主義青年団）と反キリスト教運動との関係への分析は鋭く，示唆に富んでいる。これらのほか，2000年代には東西文化の折衷と衝突の視点から近代中国におけるキリスト教の布教を論じた兪長根「절충과 충돌：근대 중국의 기독교（折衷と衝突：近代中国のキリスト教）」（『대구사학』73권，2003.11，pp. 1–33）などの研究がある⁴²。

三 むすびにかえて：これからの研究展望

以上、中国、台湾、香港、アメリカ、日本、韓国を中心に1920年代の反基運動に関する主な研究を一通りみてきた。この研究は同時代から進められ、中国、台湾、香港のみならず、アメリカや日本、韓国においても相当な研究成果が蓄積されてきた。研究視点も最初の、運動にたいするキリスト教側の反応やキリスト教宣教師というキリスト教の立場に限定するものから、学生運動史、五四運動史、神学思想史、政教関係、政治思想史、キリスト教学校教育史、教育権回復運動史、国民革命史など多方面に広がっていった。そして1980～90年代に研究への関心がピークに達した後も、新たな研究成果が続出しており、2015年には研究の利便性に資する文献資料集も出版され、これによって1920年代の反基運動にたいする研究はさらに前進するであろう。

研究成果についてみると、上述した多角的な研究によって、運動のもつ多面的な性格やその全体像が明らかとなりつつあり、とりわけ運動のキリスト教会の「本色化」に与えた影響については相当明瞭になった。しかし、運動そのものについていえば、研究がまだ手薄いと言わざるをえない。各段階の運動の発生要因に対する分析や国共両党と運動との関わりについての研究がまだ不十分であり、各地方における運動の具体的な展開やその差異、運動に関わった人たちの具体的な人物像に関する研究もきわめて少ない。また、運動がカトリック教会や仏教、イスラム教などの宗教団体や社会に与えた影響などについての研究は皆無に近い⁴³。今後の課題ともいえよう。

注

- 1 吉永亜希子「瀋陽の大学 クリスマス禁じます」『読売新聞』2017年12月19日、13版。林哲平「中国クリスマス規制 地方当局『伝統文化継承が重要』」『毎日新聞』2017年12月25日、14版。中国では中学生のときから入団申請が行われ、小学生と一部の中学生を除く中高生および大学生はみな青年団員である。
- 2 義和団運動および1920年代の反基運動との相違については、佐藤公彦の『義和団の起源とその運動——中国民衆ナショナリズムの誕生』（研文出版、1999年）と「近代中国のナショナリズムの変容と蒋介石——清末義和団から国民革命へ」（『清末のキリスト教と国際関係——太平天国から義和団・露清戦争、国民革命へ』汲古書院、2010年、487頁）を参照した。
- 3 五・三〇事件とは、1925年5月30日に上海では、日系紡績工場で争議の最中に中国人労働者が日本人職員の暴行によって死亡した事件（上海の日系紡績工場内外綿の労使紛争）に抗議してデモが行われると、上海の共同租界同局は強硬策で応じ、警察署に押し寄せた群衆に対して発砲、13人が死亡、40数人が負傷した事件である。この事件は1920年代の中国のナショナリズム運動の大きな転換点であり、この五・三〇運動を契機に反帝国主義運動（主に反英）が本格化

していく。

- 4 謝扶雅「近年非宗教及非基督教運動概述」『中華基督教会年鑑』第8期，1925年，17-24頁。この論文は英文でも発表され，N. Z. Zia “The Anti- Christian Movement in China: A Bird”，*China Mission Yearbook*, 1925, pp. 51-61 (Shanghai, 1926) がそれである。後に触れるラトゥレットは反基運動に関する記述において謝のこの英文論文を多分に参照している。
- 5 浙江省紹興府生まれの人で，中国現代の有名な哲学者・文学者・キリスト教思想家である。かれは幼年時代から伝統的な教育を受け，郷試に参加したことがある。1911年に日本に留学し，目白同文書院・東京高等師範・立教大学などで勉強するが，1916年の秋に教会奉仕の道に進むため学業を中断して中国に帰国し，中華キリスト教青年会全国協会に勤めた。1918年には総幹事余日章によって総務部の文書幹事に抜擢される。1925年11月には余日章の推薦で2年間アメリカに留学し，シカゴ大学とハーバード大学で宗教や哲学を勉強し1927年に帰国する。1928年から広州にあるキリスト教大学嶺南大学で教え，1949年には戦乱を避けて香港に移住した。『巨流点滴』（1970年）と『自辯子至電子』（1992年）2冊の自伝と『中国倫理思想ABC』（1929年），『基督教綱要』（1934年），『中国政治思想史綱』（1956）など多くの著作がある。
- 6 張欽士編『国内近十年来宗教思潮』燕京華文学会出版，1927年，1, 3-4頁。この本は1917年から1927年までの宗教またはキリスト教を批判する文章やそれに対するキリスト教知識人たちの応答の文章を集めた資料集であり，1920年代の反基運動の研究において欠かせない一冊である。
- 7 徐以驊「前言」，王治心『中国基督教史綱』上海古籍出版社，2007年，3頁。この本の漢訳版は，香港・道風書社の推進のもとで，『基督教在華伝教史』というタイトルで，2010年10月について出版された。筆者が参考にしたのがこの漢訳版である。
- 8 頼徳烈（Kenneth S. Latourette）著・雷立柏他訳『基督教在華伝教史』香港道風書社，2010年，3頁。
- 9 同上書，1頁。
- 10 同上書，585-589頁。
- 11 同上書，585頁。上下の文脈からみると，「このような愛国精神」とは，士大夫階層・文人たちのキリスト教にたいする批判・迫害をさしている。
- 12 同上書，585-586頁。面白いことに，中国人留学生の宗教にたいする否定的な見方に大きく影響したのは，アメリカよりもフランス，イギリスなどのヨーロッパの国々なのに，ラトゥレットはアメリカの要素を強調している。実はアメリカ留学組はキリスト教に友好的な者が多かった。
- 13 同上書，589頁。
- 14 徐以驊，前掲文，5-13頁。徐以驊によると，欠陥が多すぎて王治心自身も恥じて本の焼却を求めたほどであったようである。
- 15 この本については伊藤秀一の書評があり（“Chow Tse-tsung (周策縦), The May Fourth

- Movement : Intellectual Revolution in Modern China, Harvard East Asian Studies VI”『東洋史研究』19巻4号, 1961年3月, 532-541頁), 1990年代まで香港や中国本土からいくつもの中国語バージョンが出ている。筆者が参考にしたのは著者がもっとも完全な中文訳と評価した岳麓書社版である(周策縦著・陳永明等訳『五四運動史』長沙:岳麓書社, 1999年)。
- 16 この本は1987年曾鉅生によって中文翻訳書が出版された(傑西・格・盧茨著・曾鉅生訳『中国教会大学史:1850-1950』杭州:浙江教育出版社, 1987年)。
- 17 たとえば, 1981年に台湾・聯經出版事業公司より出版された『中国現代史論集』第6輯『五四運動』(張玉法編)は, 本文で紹介した葉嘉熾とルッツの研究論文をそれぞれ「民族主義と革命:1920年代学生激進主義の本質と原因」と「中国民族主義と1920年代之反基督教運動」というタイトルで収録している。また, 同書には葉嘉熾の「宗教と中国民族主義:民初知識分子反教思想的学理基礎」(もとは英文, 中華民国史料研究中心編集出版『中国現代史專題研究報告』第2輯, 1972年に収録されている)も収められ, 山本達郎と山本澄子が1953年アメリカ滞在時に連名で*Far Eastern Quarterly* (February 1953)に発表した“The Anti-Christian Movement in China, 1922-1927”も「中国反基督教運動:1922-1927」というタイトルで収録され, 80年代はじめに台湾で紹介された。
- 18 周策縦著・陳永明等訳, 前掲書, 450-458頁。
- 19 葉嘉熾, 前掲「宗教と中国民族主義:民初知識分子反教思想的学理基礎」, 99-121頁。
- 20 葉嘉熾, 前掲「民族主義と革命:1920年代学生激進主義の本質と原因」, 167-182頁。
- 21 傑西・格・盧茨著・曾鉅生訳, 前掲『中国教会大学史:1850-1950』, 203-258頁。
- 22 羅滋, 前掲「中国民族主義と1920年代之反基督教運動」, 395-416頁。
- 23 それ以前この運動について言及した研究としては, 王治心の前掲書の欠陥を補うことを志して中国人による二冊目の中国キリスト教通史を編集した楊森富編『中国基督教史』(台北:台湾商務印書館, 1968年)や, 初期中国共産主義青年団史を取り上げた王章陵『中国共産主義青年団史論(1920-1927)』(台北:国立政治大学東亜研究所, 1973年)などがある。
- 24 この論文は民国期キリスト教史の視点から書かれたもので, のちに査時傑の『民国基督教史論文集』(台北:財団法人基督教宇宙光傳播中心出版社, 1994年)に収録された。同論文集は通史的な部分, キリスト教と民国期社会文化および政治経済関係, 研究現況紹介の三部分となっているが, 民国キリスト教史研究の先駆けのものである。
- 25 たいへん興味深いことに, この時期の台湾・香港における研究はそれぞれ特色があった。それは台湾の研究が政教関係に重点をおくものが多いのに対し, 香港の研究は神学思想の面から考えるものが多いことである。研究当時の台湾と香港の異なる政治社会状況がこうした違いを生み出したと思われる。70, 80年代の台湾は国民党の一党独裁下で党政一体構造になっていた。台湾における国民党政権が安定に向かうにつれて台湾当局による宗教団体への取締りが次第に厳しくなり, 宗教団体と当局との対立が激しくなった。政教関係に重点をおいたものが多いの

は、こうした社会的政治的環境が背景にあったのに違いないだろう。他方、台湾と違ってイギリスの管轄下にあった香港は、教義・性格を異にする様々な宗教団体がともに存在する信仰の面においてたいへん自由なところであった。また、そこは中国大陸の宗教的(あるいは政治的)抑圧から逃げてきた中国人キリスト教徒たちの天国であり、中国神学研究院をはじめ複数の神学院を有していた。彼らは常にどうすればキリスト教を中国に広め、土着させることができるのかを考え、中国に適合したキリスト教を中国大陸に送り出す夢を見ていた。だから彼らの関心は比較的によく「本色神学」への思考を内包するキリスト教と中国文化・思想との調和というところに向けられたのであろう。

- 26 林栄洪『風潮中奮起的中国教会』天道書楼有限公司，1980年，16-48頁。
- 27 同上書，52-85頁。林はこれらの神学思想は中国キリスト教会の「本色運動」の産物でもありとし、その神学前提とキリスト教と中国文化との解釈の違いによって「本色神学」を五つのモデルに分けている（同上書，90-125頁）。
- 28 同上書，175頁。
- 29 同上書，230頁。
- 30 これは葉仁昌が博士論文（台湾大学政治学研究所）をもとに書いた本である。彼のこの分野における最初の研究書は、『近代中国的宗教批判：非基運動的再思』（台北：雅歌出版社，1987年）であるが、この本は修正され、『五四以後的反对基督教運動—中国政教關係的剖析』（台北：久大文化股份有限公司，1992年）の一部に収録されている。
- 31 同上書，45-46，72頁。
- 32 同上書，114-116頁。
- 33 同上書，125-156頁。
- 34 楊天宏，前掲書，394頁。
- 35 鈴江言一のこの本は当初は筆者署名のない、非公刊の限定出版であったが、戦後1953年に中江会（中国学者中江丑吉の業績を顕すための会）の斡旋によって『中国解放闘争史』という題名で東京：石崎書店より出版され、やっと陽の目をみることになった。
- 36 この論文はのちに微修正され（内容は変わってない）、『中国キリスト教史研究：プロテスタントの「土着化」を中心として』（東京：近代中国研究委員会，1972年）第2章附節（96-115頁）に収められ、2006年同書の増補改訂版が山川出版社から出されたときには第3章第5節（89-107頁）に改訂された。なお、同書の増補改訂版は英語版もあり、日本語版より6年先立って東方学会より出版されている（Sumiko Yamamoto, *History of Protestantism in China: The Indigenization of Christianity*, Tōhō Gakkai, 2000）
- 37 山本澄子「一九二〇年代の反基督教運動について」『史観』第57・8冊，1960年3月，112頁。
- 38 阿部洋編『中国ミッションスクールの研究—米中教育交流史研究序説』（東京：龍溪書舎，2010年）は、この本の増補改訂版で、補篇として新たに佐藤尚子が生前著した関連論文4本と

資料的考察2本が収録されている。

- 39 同論文は『中国社会主义文化の研究』(石川禎浩編, 京都大学人文科学研究所, 2010年5月)の中国語バージョンである『二十世纪中国的社会与文化』(石川禎浩編・袁広泉訳, 社会科学文献出版社, 2013年)に「走進『信仰』的時代: 1922年反基督教運動初探」というタイトルで収録され, 中国に紹介されている。
- 40 石川禎浩「1920年代中国における『信仰』のゆくえ——1922年の反キリスト教運動の意味するもの」, 狭間直樹編『1920年代の中国』汲古書院, 1995年, 83頁。
- 41 佐藤公彦『中国の反外国主義とナショナリズム』集広舎, 2015, 271-327頁。
- 42 兪長根『근대중국의 지역사회와 국가권력』(近代中国の地域社会と国家権力) 서울: 도서출판 신서원, 2004。
- 43 たとえば中華民国期, 寧夏や青海を統治したムスリム軍閥馬歩芳らやその管轄下のムスリムたちは共産党の反キリスト教の主張と江西ソビエト区で行われたキリスト教への反対, 弾圧に危機感を覚えて, 1949年以後共産党軍が同地域を「解放」するまで一貫してその勢力が進入することを防止し警戒し続けている。これは反基運動が中国西北イスラム教に与えた影響を考えるいい材料となるだろう。

参考文献 (出版年の順)

- 謝扶雅 (1925), 「近年非宗教及非基督教運動概述」『中華基督教会年鑑』第8期, 17-24頁
- N. Z. Zia (謝扶雅) (1925), “The Anti- Christian Movement in China: A Bird”, *China Mission Yearbook*, pp. 51-61
- 張欽士編 (1927), 『国内近十年来宗教思潮』北京: 燕京華文学会出版
- 長野朗 (1927), 『支那の反帝国主義運動』東京: 行地社出版部
- Kenneth S. Latourette (1929), *A History of Christian Mission in China*, New York: Macmillan
- 鈴江言一 (1929), 『中国無産階級運動史』満鉄調査課
- 日屋根安定 (1940), 『支那基督教史』東京: 株式会社生活社 (アジア学叢書245, 東京: 大空社, 2011年に所収されている)
- 王治心 (1940), 『中国基督教史綱』上海: 青年協會書局
- 岩村三千夫 (1949), 『中国学生運動史』東京: 株式会社世界評論社 (佐藤尚子編『中国近現代教育文献資料集』V中国教育通史, 東京: 株式会社日本図書センター, 2006年に収録されている)
- 鈴江言一 (1953), 『中国解放闘争史』東京: 石崎書店 (1929年の復刻版)
- Tatsuro and Sumiko Yamamoto (1953), “The Anti-Christian Movement in China, 1922-1927” *Far Eastern Quarterly*, February, pp. 133-147
- Chou Tse-tsung (1960), *The May Fourth Movement*, Cambridge: Harvard University Press
- 山本澄子 (1960), 「1920年代の反基督教運動について」『史観』第57・58冊

- 楊森富（1968），『中国基督教史』台北：台湾商務印書館股份有限公司
- Jessie Gregory Lutz (1971), *China and the Christian Colleges, 1850–1950*, Cornell University Press
- 山本澄子（1972），『中国キリスト教史研究：プロテスタントの「土着化」を中心として』東京：近代中国研究委員会
- 王章偉（1973），『中国共產主義青年団史論（1920–1927）』台北：国立政治大学東亞研究所
- 澤正彦（1974），「中国에서의 基督教과 反基督教運動」『神学思想』第6号，pp. 639–658
- Jessie Gregory Lutz (1976), “Chinese Nationalism and the Anti-Christian Campaigns of the 1920s”, *Modern Asia Studies*, 10
- Ka-che Yip (1976), “Nationalism and Revolution: The Nature and Causes of Student Activism in the 1920s”, Chan and Etzold, *China in the 1920s*, New York
- 林榮洪（1980）『風潮中奮起的中国教会』香港：天道書樓有限公司
- Ka-che Yip (1980), *Religion, nationalism, and Chinese students : the anti-Christian movement of 1922–1927*, Bellingham: Center for East Asian Studies, Western Washington University
- 顧長声（1981），『伝教師与近代中国』上海：上海人民出版社
- 張玉法編（1981），『中国現代史論集』第6輯『五四運動』台北：聯經出版事業公司
- 尾崎文昭（1983），「陳独秀と別れるに至った周作人——一九二二年非基督教運動のなかでの衝突を中心に」『日本中国学会』，232–244頁
- 林澤生（1984），「廿年代中国反教運動与教会回应」台北：台湾神学院道学修士論文
- 顧長声（1985），『從馬礼遜到司徒雷登——來華傳教士評伝』上海：上海人民出版社
- 中華文化復興運動推行委員會（1985），『中国近代現代史論集』④第4編『教案与反西教』台北：台湾商務印書館
- 趙天恩編（1986），『中共对基督教的政策』台北：中華福音神学院出版社
- 中華文化復興運動推行委員會（1986），『中国近代現代史論集』④第22編『新文化運動』台北：台湾商務印書館
- 吳在環（1986），「五・四運動期 前後 中国知識人の反基督教論争」『역사학보』제111집，pp. 113–141
- 傑西·格·盧茨（Jessie Gregory Lutz）著·曾鉅生訳（1987），『中国教会大学史：1850–1950』杭州：浙江教育出版社
- 葉仁昌（1987），『近代中国的宗教批判：非基運動の再思』台北：雅歌出版社
- Jessie Gregory Lutz (1988), *Chinese Politics and Christian Missions: The Anti-Christian Movements of 1920–28*, Notre Dame: Cross Cultural publications
- 許学士（1988），「一九二〇年代中国民族主義与基督徒的政治觀」台北：中国文化大学米中關係研究所修士論文

- 蕭延中・朱芸編(1989),『啓蒙的価値与局限—台港学者論五四』太原:山西人民出版社
- 中国社会科学院科研局・『中国社会科学』雜誌社編(1989),『五四運動与中国文化建設』北京:社会科学文献出版社
- 閔斗基(1990),「国民革命運動과反基督教運動」,閔斗基編『中国国民革命運動의構造分析』서울:지식산업사, pp. 141-179
- 佐藤尚子(1990),『米中教育交流史研究序説—中国ミッションスクールの研究』東京:龍溪書舎
- 葉仁昌(1992),『五四以後的反对基督教運動—中国政教關係的剖析』台北:久大文化股份有限公司
- 王成勉(1993),『文社の盛衰』台北:財団法人基督教学宇宙光傳播中心出版社
- 楊天宏(1994),『基督教与近代中国』成都:四川人民出版社
- 查時傑(1994),『民国基督教史論文集』台北:財団法人基督教学宇宙光傳播中心出版社
- 劉小楓(1995),『「道」与「言」—華夏文化与基督文化相遇』上海:上海三聯書店
- 石川禎浩(1995),「1920年代中国における「信仰」のゆくえ—1922年の反キリスト教運動の意味するもの」(狭間直樹編『1920年代の中国』東京:汲古書院), 67-95頁
- 李寬淑(1995),『중국 기독교사』서울:쿰란출판사
- 顧長声(1995),『伝教師与近代中国』上海:上海人民出版社, 增訂版
- 顧衛民(1996),『基督教与近代中国社会』(近代中国社会史叢書)上海:上海人民出版社
- 吳国安(1998),「中国基督徒对時代的回應(一九一九年至一九二六年)—以『生命月刊』和『真理週刊』為中心的探討」台北:國立台灣大學歷史學研究所修士論文
- 姜明淑(1998),「1920년대 중국 반기독교 운동과 식민지 조선의 사회주의 운동」, 한국기독교연구회 『한국기독교와 역사』 제8호, pp. 143-171
- 李寬淑(1998),『中国基督教史略』北京:社会科学文献出版社
- 林榮洪(1998),『中華神學五十年1900-1949』香港:宣道出版社
- 周策縱(1999),『五四運動史』黄山:岳麓書社
- 胡衛清(2000),『普遍主義的挑戰—近代中国基督教教育研究(1877-1927)』上海:上海人民出版社
- 史靜寰・王立新(2000),『基督教教育与中国知識分子』福州:福建教育出版社
- 姚民權・羅偉虹(2000),『中国基督教簡史』北京:宗教文化出版社
- 蔡政傑(2003),「非基督教運動(1922-1927)对基督教青年体育事業發展之影響」『国立台北師範学院學報』第16卷第2期, 281-306頁
- 劉家峰・劉天路(2003),『抗日戰爭時期的基督教大學』福州:福建教育出版社
- 羅冠宗(2003),『前事不忘後事之師:帝國主義利用基督教侵略中国史実術評』北京:宗教文化出版社
- 俞長根(2003),「절충과 충돌: 근대 중국의 기독교」『대구사학』 73권, pp. 1-33
- 俞長根(2004),『근대중국의 지역사회와 국가권력』서울:도서출판 신서원
- 段琦(2005),『中国基督教本色化史稿』台北:宇宙光全人關懷出版
- 陶飛聖(2005),『辺縁の歴史—基督教与近代中国』上海:上海古籍出版社

- 楊天宏（2005），『基督教与民国知識分子』北京：人民出版社，增補改訂版
- 趙天恩（2006），『中国教会史論文集』台北：財団法人基督教宇宙光全人關懷機構
- 吳小龍（2006），『少年中国学会研究』上海：上海三聯書店
- 山本澄子（2006），『中国キリスト教史研究』東京：山川出版社，增補改訂版
- 王治心（2007），『中国基督教史綱』上海：上海古籍出版社，復刻版
- 楊天宏（2008），『政党建置与民国政制走向』北京：社会科学文献出版社
- 富坂キリスト教センター編（2008），『原典現代中国キリスト教資料集：プロテスタント教会と中国
政府の重要文献1950-2000』東京：新教出版社
- 吳在環（2010），「한·중사상 문화 교류 관점에서 본 5·4 시기 반기독교 운동과 개방이후의 ‘与时俱進」
（「韓·中思想文化交流の観点からみた五四時期の反キリスト教運動と開放以後の『与时俱進』」
『한국사상과 문화』55卷，pp. 161-186
- 顧衛民（2010），『基督教与近代中国社会』上海：上海人民出版社，增訂版
- 賴德烈（Kenneth S. Latourette）著・雷立柏等訳（2010），『基督教在華伝教史』香港道風書社
- 佐藤尚子著・阿部洋編（2010），『中国ミッションスクールの研究究一—米中教育交流史研究序説』東
京：龍溪書舎，增補改訂版
- 徐亦猛（2010），「中国におけるキリスト教本色化（土着化）運動：1920年代を中心に」関西学院大
学博士論文
- 楊思信・郭淑蘭（2010），『教育与国権—1920年代中国收回教育權運動研究』北京：光明日報出版社
- 朱海燕（2010），「中華民國初期における宗教批判について」『言語・地域文化研究』第16号，111-
129頁
- 呂実強（2011），「民初知識分子反基督教思想之分析」，呂実強『近代中国知識分子反基督教問題論
文集』桂林：広西師範大学出版社，86-120頁（初発表は1981年）
- 楊劍龍（2012），『「五四」新文化運動与基督教文化思潮』上海：上海人民出版社
- 石川禎浩編・袁広泉訳（2013），『二十世紀中国的社会与文化』北京：社会科学文献出版社
- 唐曉峰・王帥編（2015），『民国時期非基督教運動重要文献彙編』北京：社会科学文献出版社
- 朱海燕（2016），「1920年代中国における反キリスト教運動と中国キリスト教会の本色化」『明治学
院大学キリスト教研究所紀要』第48号，265-290頁
- 朱海燕（2016），「中国の共産主義と反キリスト教運動—1922年の世界キリスト教学生同盟會議の開
催への反対」『アジア研究』第62卷第3号，69-85頁
- 朱海燕（2017），「『非教』と『護教』のせめぎあい—1922年の広東における『非キリスト教』運動—」
『明治学院大学キリスト教研究所紀要』第49号，53-80頁
- 朱海燕（2018），「中国国民党と反キリスト教運動—1925年孫文のキリスト教的葬式を手掛かりに—」
『明治学院大学キリスト教研究所紀要』第50号，73-100頁

The Anti-Christian Movement in China in the 1920s

ZHU Haiyan *

abstract

In the 1920s, an Anti-Christian Movement occurred in China, centering on intellectuals and young students, with the objectives of rejecting the restoration of national sovereignty and resisting cultural invasion from foreign countries. This movement, which was affected intensely by the international situation surrounding China, had great influence not only on the practice of Christianity and its place in school education, but also on the National Revolution, politics and diplomacy, thought and culture. This article aims to survey the academic literature on this movement. This literature started in the 1920s and was conducted not only in China but also in the USA, Japan, Taiwan, Hong Kong, and Republic of Korea. Many such academic studies have accumulated. The points of view of the authors of these studies vary considerably, and each focuses on a distinct aspect, such as the history of Christianity in China, the history of students' movements, the history of political thought, and so on. From these studies the multi-faceted characteristics of the Anti-Christian Movement can be clearly understood and its characteristics fully known. The next challenge is to analyze each element which affected the spread of the movement, and also to look at the movement multi-dimensionally by focusing on the different motivations of the participants and the differences across time and across regions in which the movement appeared.

Keywords

Anti-Christian Movement, China, USA, Japan, Taiwan, Hong Kong, Republic of Korea, Survey

* Correspondence to: ZHU Haiyan
Guest Researcher, Institute for Christian Studies Meiji Gakuin University
1-2-37 Shirokanedai, Minato-ku, Tokyo 108-8636
E-mail : haiyan0305@hotmail.co.jp